

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回、一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸會特別取扱承認雜誌第三五二號
昭和二十八年十二月二十五日印刷
昭和二十九年一月一日發行

第二十卷 一月號

淨

土



文

正月號

謹賀新年

元旦

法然上人鑽仰會

淨土 正月号 目次

念佛申すころ……………吉田絃二郎(1)

興隆する佛教……………椎尾辨匡(4)

知性による求め……………奥野信太郎(8)

脱皮する寺院(清水市實相寺)……………(13)

北邊開教……………石上博應(24)

三番叟……………梅津和夫(22)

淨土百人首(一)……………(10)

童馬と驢馬……………内山憲尙(16)

馬と佛教……………石上善應(32)

美男におわすみ佛……………今井宇三郎(26)

小消息講義……………佐藤賢順(29)

津の戸の尊顔……………小俣昌雄(18)

芝園だより……………表(三) 誌上年賀……………表(四)

表紙……………松濤達文

念佛申すころ



志田 結二 郎

千北兄、君の手紙を讀んでゐる間にぼくは遠い昔の故郷を思ひ出しました。西方寺のお説教のことを思ひ出しました。西方寺の城のやうな高い石垣、二抱へも三抱へもありさうな老松が浮かんで來ました。

星の寒い夜でした。ぼくたちは五日も六日もつゞいて西方寺のお説教を聴きにゆきました。一年にたゞ一度京の本山からやつてくるお坊さんのお説教だといふので、村中の人が夜になると、西方寺にあつまつてゆくのでし

た。人々のなかには小ひさな袈裟——小五條——をかけた人も二三見かけられました。

子供たちは提灯を持たされて、山坂を越えてゆくのが面白く、たゞわけもなしに五晩六晩つゞけての説教會にゆくのでした。

説教が一段すむと世話人が長い柄の干杓をまはしてくるのです。みんなが干杓のなかに錢を投げるのです。錢がはいる毎にかちりと音を立てるのが子供心には面白か

つたのです。

どんな説教をされたのか、子供心にはわからう筈はありません。しかしわたくしたちは寒い夜空の下を飽かす西方寺の説教會に参じました。そしてゆらぐ蠟燭の光りを浴びつゝ、お念佛申す大人たちにつれて、わたくしたちもお念佛を申すのでした。

千北君。あのころの子供心には何一つお説教はわからなかつたが、あの故郷の山寺の冬夜の念佛會の空氣といふものはぼくたち子供の魂深く宗教的なものを植ゑつけてくれたことを今になつてしみじみと思ひます。

大人たちが説教を聽いて理知で受け容れるのに對して子供たちはからだ全體を以つて、魂そのものを以つて感じ取るのであらうかと思ひます。

だから宗教的教育のためにはなるべく早く子供を、その雰圍氣のなかに入れてやることが肝要だと思ひます。踊りや音楽の稽古は四五歳から始めるのがいゝとされてゐるが、まして大切な宗教的情操の教育は幼いころから

施す必要があると思ひます。

六十年以上の時をへだてた今日なほ念佛を申せば、寒い霜夜の星空を仰ぎながら山路をたどつて西方寺の念佛會に駆けつけた子供のころのことがなつかしく思ひ出されます。

千北君 昨日、ぼくは恰度一年振りで東京に出ました。澁谷、青山、宮城前から日本橋を経て久松町まで行つて見ました。そして自動車の洪水にもおどろきました。が、それよりも更におどろいたことは街を歩いてゐる人々の顔の表情がかはつてしまつたことです。

昔は日本橋の下を浚へてゐる船の作業をのんびりした顔でながめてゐた群集があり、白い壁の倉の列んだ河岸のあたりには都鳥が飛んでゐたりしました。ぼくも丸善に本をもとめに行つたかへりに、日本橋の上にたゞずんで秋の空高く飛ぶ白い雲をながめたことを記憶してゐます。東京もあのころは落ちついてゐて、静かだつたので

すね。綱島梁川が「われ神を見たり」といつたのもあの時代でした。

人は神について、佛について靜思する心を持つてゐたのでした。まことにうらやましい、ありがたい時代でした。

昨日、自動車のなかから日本橋をながめてゐると、ふと、横丁から出て來た一人の若い社員風な男がありました。その男を見た刹那ぼくは「何といふ陰鬱な顔だろう」と思ひました。

その男の眉と眼の間には暗い陰翳が漂ふてゐました。

その男につゞいて、若い女が自轉車を走らせて來ましたが、その女も眉と眼の間に暗い影を漂はせてゐました。

さらに後から後からとあらはれて來る人たちが一人残らず眉と眼の間に暗い影を漂はせてゐることに氣付きました。

ぼくはかへりの自動車のなかで、今日見た都會の人たちの暗い表情についていろいろと考へて見ました。

戦争の不安、生活の不安、望みなき現代生活……さまさまの暗い壓迫が人々の表情をこわばらせてゐるのであらうと思います。そのために人々は二度と會ひがたき人生に生まれたよろこびを靜かに味ふことも忘れてゐるのでせう。ぼく自身も亦暗い表情をたゞよはせてゐるとしたらまことに相すまぬことだと思ひます。

法然上人が靜かに思惟の生活をなされたのも、恐ろしい源平闘争の不安きはまりなき時代でした。

生死ともに、明日のことも一切をあなたまかせにして春を待ちませう。

千北君。久し振りの東京行きですつかり草臥れたが、風呂にはいると庭の柚子の實が二つぽかぽかと湯のなかに浮かんで、ぼくのために足拍子を取つて踊つてくれてゐるやうでした。

天涯孤獨の身にもありがたい救ひはあるもので、六十年前の念佛會の子供心を取りもどしました。

年頭
所感

興隆する佛法



増上寺 椎尾 辨 匡

佛教が之から大に興隆すると云へば、ヤソ教や新興宗教が盛んで、佛教などはひとつこむんだ、何の興隆があるかと云ふ人もあらう。が、私は次のような數點から佛教は初めて空前の興隆をする時が來たんだと考へます。

第一に、二千五百年の昔とは云ふが、御釋迦様の悟り方は、時代、社會とよほどかけはなれたもので一般の一人々々に到るまで判つたか、信じられたか疑はしい。あまりよくわかつていなかつたんだといふ事が此頃では昔よりよく判るようになりました。

その證據はふつう小乗經・大乘經とするお經があつて、

小乗經ではいろ／＼の佛や淨土等は説かない、これが古いお經の形です。所が大乘經は新しく説き擴げたもので、それにいろ／＼の佛が出てくる。それでは御釋迦様は佛様を信じていなかつた時のお經が基になつて數百年經つてから佛様のことを主に説くようになったかと云へば、佛經は佛經でなかつたといふことになる。それはまちがひで、佛經は佛様を信ずることを根本としておる。その大元の御釋迦様が佛様を信ぜず、拜まず、それを話ししまさなかつた筈はない。今詳しくは申しませんが、御釋迦様の三十八歳でお悟りして八十歳におかくれになつてから五十年間位はま

とまつたお経といふものはない。その後百年間位に古い元になつたお経が出来てゐるが、それには過去の諸佛・現在佛・未來の諸佛と三世に渡つての佛を拜み敬ひなされた事ものつておる。極めて簡單ではあるが、いろ／＼の佛を表はす短い經がいくつもある。其が次の百年位には大分長いお経になるが、拜まれる佛様の信仰はへる。その代り厚くなつた御釋迦様の御説教と之を読む坊さんとを尊ぶ。即ち三寶の中の佛が薄くなつて法寶と僧寶とが重んぜられるやうになつた。この事は御釋迦様の信じなされた佛様といふ事が餘りよく判らなかつたと云へる。

第二にはなぜ、御釋迦様がお示しになつた佛様がそんなに判らなかつたか。それはものゝ考へ方が全く新しかつたからである。どういふふうにかといふ事は最も古いお経の中にも無記と云ふ事がある。即ち我・自我は常住か無常か、(いつまでもある變らないものか、いなか)その兩方か、兩方でもないか。世界が有限か、無限か、兩方か、兩方でないか。如來は滅後(亡くなられたあと)にあるか、

無いか、その兩方か、兩方でないか。心と身とは、一つか違ふか、といふ十四の問題を弟子たちは朝深く考へた。西洋哲學をやつた人では認識を喧ましく云つたカントが、二の無記を唱へたといふ事をよく知つてゐる。西洋では二百年足らず以前の大學説が、二千五百年以前にその十二の外に肉體と精神の當爲問題まで加へて別々にあるとかなひとかといふ事では、見様が悪いといふ事にふれただけでも佛教の考へ方は進んでゐる。

この佛教獨特の考へ方がそれ／＼の經に五つの眼とか三つの眼とか、五觀とか説明してあるが、多くの人はよく考へて讀んでいない。觀音經にも眞觀・清淨觀・廣大智慧觀・悲觀と慈觀といふ事がでゝおる。之が觀音の觀といふ事である。ものを素直にそのまゝに受取つてしかも碍さへられぬよう、すきとおるよういろ／＼のものにのびて通するやうに、迷惑をさせぬやうに、親切の有難さを感じるやうに觀るとでも云へば凡そ云ひ表はされる。

ただ目で見たとて、太陽が東から西へ入るようでも天文

學者は違ふといひ、地球が自轉すると學んだものは太陽が東から西に歩くのではない、とするように、ものゝ見方は大切であるが、特にあるとか別々とか云ふ事は私達一般の考へたやり方で、本當は生きるのだ。木を切つて木目で何年経つたとは判るが木は死んでしまふ。頭手足をばら／＼にして分つても、それは死んだ死骸が判る。通常の知識はこのような死骸ばかりでだめだ。本當に生きる事が大切。それは、まとめて親切に育てるやうに生かすようにするのだと御釋迦様は説かれた。之を慈心不殺とも、又之を歸依佛とも説かれる。其をどこでも、いつでも、何事にも認めるのを南無阿彌陀佛となされた。南無阿彌陀佛とはつまりぬ汚い厭なものにも最上の佛様を認めるのだと云えば承知せぬ人も多いであらう。それは御釋迦様の見方が判らぬからである。有量うりやう（限りあるもの）に無量むりやう（限りなき永遠、はてしなくひろがる關係）を見、無爲むゐ（汚れなき悟りの境地）を有爲ゐ（ほんのうに蓋はれ世界）に見なければならぬと説いておる。無限絶對とか、廣大慈悲とか云ふ事を風の一吹きにも

水の一滴にも、今の一語にも喜び頂く事が正しいとする。

この見方は眞に尊いが、科學の知識が少しくあれば、これに縛られて、生き行く有難さを見る事ができず、生きようとしておりながら、我が身體・我が魂・生命なぞと拘つて、ほんとうに生きる有難さを捨てゝしまふ。之は見方が足らぬのだ。まだ滅後百年位は、いくらか之がわかつていたが、だん／＼わからぬようになつた。たま／＼大乘經に藥師や不動や無量壽やといろ／＼の佛さまを述べても一般には本當の拜み方はわかつてゐなかつた。之が今はだんだん判るようになると思う。即ち二千五百年の經文や説明や扱方が不十分であつたと氣付いて、御釋迦様の御示しなされた拜み方や佛様の有難さに暮す暮し方やらが頂ける時が近づいたと思う。

第三に御釋迦様は多くの無信仰の目先だけ日々おかしくやりたいといふ話も聞いても見、宗教々々といつて火の神水の神のようにそれ／＼の神様を、或時はそれ以上の一つの神を主張したり、修行として禁欲・斷食を努めたり、す

る事も十分にやつてみなさつたが、其はほんとうの宗教・人生になつてゐないとお氣づきになつた。今もこの本當の宗教人生でない方ほうにまごつくものが多いが、之ではいかぬと考へる人も又ふえた。それでほんとうに佛教が受けとられる時が近づいたのである。

第四には明治以來日本が進んだといつても東洋各國をばかにして歐米ばかり崇めた。まづこの戦争中には日本だけ天狗になつて東洋も西洋もばかにした。それは偏見であり間ちがひであつた。釋尊の佛教の擴つた國々、人々を友達として出直す時も來た。アジアに正しい佛教の考方で信仰

御 忌 會 (正月のこよみ)

建曆二年正月二十三日は、一枚起請文を頂いた日。その後二日おいて、法然上人は淨土に往生せられた。

汲めども盡きぬ吉水の流れは、爾來七百有余年、法の燈火は今日のわれ／＼の生活に、力強い命の泉を與えている。正月は新らしい年の出發であると共に、又元祖上人の教えを再確認する月でもある。

し生活する事が發達する時、世界の一神とか多神とか、唯物とか、唯心とか、競争とか斗争とか並べたてゝおる考が打破されて本當に生きる人々の敬ひ合ひ、育て合ふ事によつて、人生き社會も草木も虫けらも美しい育ちの中に進歩やまざる世界が認められる時が來た。

阿彌陀經の句であるが、私は次のやうに讀んで味はせて頂く。

極樂と云ふ所は生きそこなひのものが、生きるようにな
る所で、本當に生きるものには後退りがない。従つて最上
の觀音勢至のやうな御方が數限りもない。それ故、又そこ
に參りたい。南無阿彌陀佛するものには必ずそこに行けば
毎日故郷にも歸り、あらゆる苦しめるものの所に助けに歩
く、御釋迦様は之を説き之の極樂行きをすゝめる。之が法
然上人が凡入報土ぼんにゅうほうど (ぼんのうあるわれ／＼が、佛の國に救はれ
て生きる) をおすゝめになつた阿彌陀經の衆生往生證しゆじやうおうじやうしやう (人
すべて必ず彌陀の淨土に生れることの御證明) の教の意味であ
ります。

知性による求め

奥野信太郎

あなたは神を信じますかといふやうなアンケートを發すると、およそインテリと稱せられるほどの人は、揃ひも揃つて自分は無神論者だ無信仰だと、實に明快に態度をはつきりさせてゐるものが大部分だ。むしろさう答へることがインテリとしての誇りさへあるかに感ぜられるほど、その口吻は得意げである。

ぼくはかうした答を平然となし得る日本のインテリといふもののありやうを、空怖しく思ふものの一人である。かりにあなたは戀愛を認めますかとか、あるひは戀愛の經驗

がありますかといふアンケートであつたならば、おそらくそれぞれいろいろな回答に接することであらう。よし戀愛の未経験者といへども、戀愛といふ事實はこれを認めるにちがひない。戀愛を認めて信仰を認めないといふ矛盾をかれらはどう説明するつもりであらうか。

一知半解といふことばどほり、それはをかしなことである。をかしなことといつてゐるうちはまだしもである。一歩進んで考へるならば、かうした宗教への無關心が、いかに民族の文明そのものを輕薄なものにするかといふことに

思ひいたつたとき、われわれは慄然とせざるを得ない。

ボードレエルのディアボリズムは、ボードレエルがあまりにも神を意識したところから生れ出てゐる。ニイチエの思想もまた神を知つたものの逆説である。かうした苦惱が近代の藝術にどれほど大きな成果を示してゐるかを考へてみると、さらでだになんでもかんでも附焼刃ですませてゐる日本のインテリのものの感じかた考へかたといふものは、實に空怖しいものではあるまいか。

(9)
無神論者は有神論者に對していひ得ることばである。日本の多くのインテリが、自分は無神論者だと簡單にはつきりと聲明してゐるのは、けつして有神論に對する強い反對としての無神論ではない。いはば無關心なのである。無關心であることを無神論者だと稱すること自體、それはとてもない誤謬であり、僭稱であり、不正でさへもある。無神論は結局神への強い關心から生れた結論の一種にすぎない。

いものだからである。

一方佛壇に先祖の靈を祭り、神棚に燈明をあげて信心だと心得てゐる輩が多いのも、インテリの口幅つたい無神論と同様、やはり心を寂しくさせられる。苦惱多き人生の苦惱を、けつして回避したりごまかしたりすることなく、あくまで勇敢に直視して、正しい知性の判斷によつて處理してゆく力を得んとする努力こそ、宗教によつて獲得できるものである。信仰はつねに知性とともにあるべきはずのものである。知性なくしてなんの聖寵ぞやである。

われわれ人間の一人一人が、それぞれ「考へる葦」の一本一本になり得たとき、微風のやうに神の恵みは訪れ、太陽の光にもまして温かな愛がみちひろがることであらう。愛は神よりあたへられるものではあるが、求めなければあたへられるものではない。宗教的意志の尊さといふことが重視される所以もこれをおいて他にはないのである。

淨土百人首

光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の心を

法然上人

月かげのいたらぬさとはなけれども

ながむる人のこゝろにぞすむ

「空花和歌集」

一向俊聖

いと易く唱ふる法の一筋は、うむの心を彌陀に任せて

以八

こゝも風かしこも波の朝あらし、やすからざりとちどりなくなり

一遍

いつまでも出いる人のいきあらば、彌陀のみのりのかぜはたえせじ

如一

西へ行く道のしるべはなか／＼に、たゞ愚なる心なりけり

法洲

かばかりの報としらば自ら、勵まずとても御名やすすまん

夢さむるかねの響にうちそへて、十たびの御名をとなへつるかな

法岸

堀川入道右大臣

寄レ月念三極樂といへる心を詠み侍りける

いる月を見るとや人は思ふらむ、心をかけて西にむかへば

〔千載集〕

辨榮

阿彌陀佛と心はほとけにうつせみの、我をはなれてのどけかりけり

辨乳母(藤原顯時女)

懺法おこなひ侍りけるに佛に奉らむとて周防内侍の

許に菊をこひ侍りけるにおこせて侍りける返事に

八重菊にはちすの露を置きそへて、九しなまでうつろはしつる

〔後拾遺集〕

頓阿

西へ行く道より外は今の世に、浮世を出る門やなからん

徳本

鳥鳴く誰そといひてあとしさり、後からくる無常しらずに

了實上人

我は唯御名を唱うるばかりなり、數は佛のしろしめすらん

隆堯

神も見よ佛も照せ我心、後の世ならで願ふ日ぞなき

覺空上人

立ならぶかけやなからん萬代の、後まで照す法のとほし火

學 信

いかばかりたのしからまし迎らる、花のうてなの深き御法は

關 通

けがさじなにござる末の世なりとも、もと吉水の清きながれを

他 阿

西へ行くみちしる人は阿彌陀佛と、となふる聲に身をぞ任する

大 成

露の身はきへてもそらにありあけの月のこゝろやにしへ行らん

諦忍律師

我庵の軒のしのぶの忍音に、となへて御名の花はさきつゝ

蓮生法師

道もなく忘れはてたる故郷に、月はたずねて猶ぞすみける

蓮 如

彌陀たのむ我身の心のたふとさにいつもなみだにぬるる袖かな

禮 智 阿

唱ふれば生るゝものとしりながらなをたのもしき花の色かな

無 能

はかなくもあだなる花のいろゝに、露もこゝろをそむるもの

皇后宮肥後

教へおきて入にし月のなかりせば、いかで心を西にかけまし

〔金葉集〕

國 豐

つみとがは露とや消む御名となふ、阿彌陀佛の照す光に

市門にかきつけて侍りける 空也上人

ひとたびも南無阿彌陀佛といふ人の、蓮の上にのぼらぬはなし

〔拾遺集〕

阿彌陀經の心を詠める 平 康頼

鳥の音も浪の音にぞかよふなる、おなじ御法を聞けばなりけり

〔千載集〕

舟しあれば千叟の石も浮ぶてふ、誓の海に波立つなゆめ 兼好法師

障子のゑに天王寺の西門にて法師の舟にのりて西さまに

漕ぎはなれて行くかたかける所をよめる 源俊賴朝臣

阿彌陀佛となふる聲をかちにてや、苦しき海を漕ぎ離るらむ

〔金葉集〕

我だにもまつ極樂にうまれなば、しるもしらぬもみなむかへて

〔新古今集〕

ん 佛 天

思ひきや世のうき波に浮き沈み、あらぬすまひに年をへむとは

佛 定

朝な夕なこゝろにかけしむらさきの、雲のむかへはいまとなり

けり

向阿是心

おもひたつ表の色はあさくとも、かへらじものよ黒染の袖

永觀律師

往生講式かき侍りける時教化の歌よみ侍りける

みな人をわたさむと思ふ心こそ、極樂にゆくしるべなりけれ

〔千載集〕

的 門

露程も頼む心のあるならば、御のりの舟に乗ると知るべし

貞 極

此里は名のみ流れて吉水の、濁らぬ末を汲む人ぞなき

西行法師

観心をよみ侍りける

闇晴れて心の空にすむ月は、西の山邊や近くなるらむ

〔新古今集〕

西 念

身をすてゝ法を求むるともがらは、遂には彌陀の極樂に住み

〔極樂願往生歌〕

左大將濟時白川にて説經せさせ侍りけるに

實方朝臣

今日よりは露の命も惜しからず、はちすの上の玉とちぎれん

〔拾遺集〕

炭 興

阿彌陀佛の聲のうちなるかくれ家は昔は今もすみよかりける

行 基

ほろ／＼と鳴く山鳥の聲きけば、父かとぞ思う母かとぞ思う

觀無量壽經

令聲不絶具足十念

行 誠上人

南無と思ひ阿彌陀佛ほとけといふ外は、いふこともなし思ふこともなし

〔釋教百首〕

さとり道迷ふ街とわかれても、おのが心の外にやはある

眞阿上人

慈悲の目に悪しと思う人はなしとがある身こそなほあわれなり

聖徳太子

急げ人彌陀の御船の通う世に、乗りおくれなば誰か渡さむ

證空上人

山がつの白木のかうし其の儘に、漆つけねばはげ色もなし

眞 淵

花紅葉さそう色香を惜むまに、身の春秋もすえの夕風

慈 鎮

昨日見し人ぞと問はゞ今日はなし、明日又誰か我を問わまし

詠阿彌陀經和歌

淨 阿

いつはりの言の葉ならぬことの葉とみな數々にとくみのりかな

慈 芳

唱ふなる口より出づる息ぼとけ、こゑこゑごとに彌陀ぞあらは

證 空

南無阿彌陀佛の御名と思ひしに、唱ふる人の姿なりけり

稱 念

たちかへりふたゝびものを思ふなよ、いつのわかれかわからざるべき

如蓮華在水

寂 念

水のおもにいづる蓮の色はみなこの世の外のものとこそすれ

〔法門百首〕

脱皮する寺院



清水 實相寺

時代の流れは唯それが存続し得るからと云つて、無爲に徒食して居る中にそのものを亡ぼして行く。寺院も又その例に漏れない。

心ある人々は、こうした流れに抗して、常によりよきものを創造し、又實踐する。幼稚園の建設や、種々な社會事業、教化事業は、そうしたものの一つのあらわれである。

こうした活動もさる事ながら、寺院の環境そのものも、唯過去のものであつてはならない。環境に依つてかもし出されるものが、どれ程大きな教化の力となるかは今更云うまでもない事である。戦災は、ある意味では、そうした轉機を與えてくれたとも云えよう。轉禍爲福。そこに如何なる構想が、あるであらうか。少しくこの觀點から、新しい寺をめぐつてみたい。

静岡県、清水市の實相寺（住職、中村康隆氏）は、昨年八月盛大な落成式をあげた。優美でスマートな近代建築は、數ある新らしい寺院の中でも、特筆すべきものであらう。

總工費四百余萬圓と言はれるこの建築は、そう簡単に出來たわけではない。今その経過を見てみると、

實相寺本堂再建経過

①月掛積立寄附金勸募

昭和二十四年十一月より開始

②洋風建築案決定 二十七年一月

③ 設計依頼 八月

④本堂建築許可

十二月

⑤着工（地鎮祭、着工式）

二十八年一月十五日

⑥竣工（工事引渡式）

七月六日

と言つた次第で仲々一朝一夕のことではない

入佛式

焼野原に出來上つたこの建築物は、鐵筋コンクリート建である。これをコンクリートにした理由として、中村氏は、

1、建築用材の不足は年と共に増加する
2、今後の建築は耐震、耐火に主眼を置くべきこと

3、戦後の莫大な木材需要の中にあつて本堂建築のような大量用材の使用によつて一般の需要を少しでも窮屈にするは宗教本來の立場から見て申譯ないこと、
4、晩かれ早かれ一度は忍ばなければならぬ再建の苦勞は成可く恒久性あるものを作ることによつて、孫子の代迄輕減するのが本旨ではないか。

と述べられた。

又これを純洋風とした理由については、

「戦後、従来の本堂様式の缺陷を是正せんとする新様式寺院が盛になるのは明かであるが中には單にあちこちの古い建築様式の寄集めになつていたり、反對に従來も見られた様な古い木造本堂様式に従つて材料を鐵筋に求めるにとゞめたり（それが中途半端な過渡的様式に過ぎないことは明かである）様式と資材との上に統一もないのが多い。出來得れば近代様式に統一することが望ましい。」と語られた。

この設計は、東京工大、藤岡教授に依り設計せられ、入佛式も、又新趣向をこらして盛大に行はれた。參考までにかゝげてみよう。

第一日

午後十二時 稚兒行列（御本尊遷座練供養）

午後二時 本堂祝典

午後三時半 狂言「重喜」

和泉流 井上松次郎

五時 歴代先祖代々追悼式

五時半 祝 宴

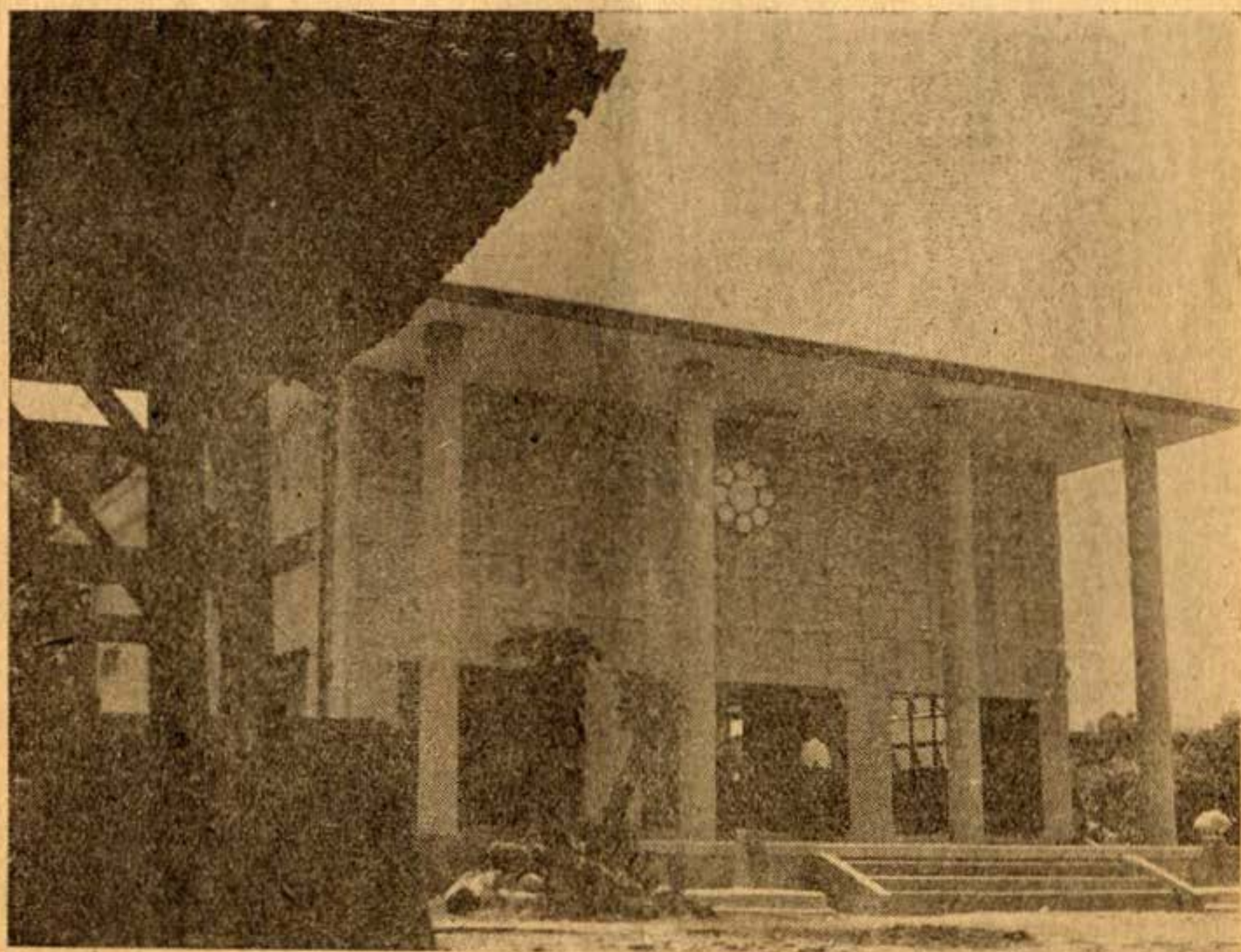
七時 記念映畫會 市教育委員會提供

第二日

午後一時より十一時迄 御詠歌大會

特徴としてあげうるもの

①正面石段の兩側にあつた用水槽を廢して「花立て」並に「旗竿立て」を作り、冠婚葬祭には花を立て、葬事は弔旗を祝事には佛旗、紅白旗、日章旗等を立てる。尙旗竿は屋上にも三本立てられるようにし併せて五本、施餓鬼會等には吹流しや佛旗乃至五色旗



を立てることが出来る。

②正面の扉は全部開放出来るようにしてあり、屋内に收容し切れぬ人々のために正面軒下に席を設け得るようにしてある。

③外陣、間口六間×奥行三間半、は多場の冷え込みを少くするためと土足にて入り得るようにするために、床をフローリングブロックで敷き、折疊み椅子を設置した。(現在百ヶ)。尙お場合により坐り得るよう吳座を常備することにした。

中央部六間二尺×二間半は疊敷きとし中ノ間十五疊(三間×二間半)兩脇は七疊半に一尺の地袋を作り手荷物を入れるようにした。

葬儀等には中ノ間をも内陣として用いるが日常の法要等には、脇の間を控の席として中ノ間を施主参列者席に用いる。但し中ノ間全體を内陣として用いるには参列者が多過ぎるような場合、内陣丈では教役者の法要儀式執行に狭すぎるような場合には、三尺なり一間なり一時間なり適宜に中ノ間に置舞臺を敷きこれを以て一般席との區別とする。

置舞臺は、中ノ間十五疊全體に敷きうる

からこゝを舞臺として兒童劇、舞踊、仕舞等の諸會合に開放することが出来る。その場合は内陣と中ノ間の仕切りの八枚鉤戸(屏風開き)の扉を閉め切る。外陣と中ノ間の仕切りは開閉幕を以てする。映畫會の時は八枚屏風扉の前に映寫幕をはる。

④内陣位牌堂は中の間兩脇の間より六寸高、中の間兩脇の間は外陣より一尺二寸高くしてある。

⑤内陣は壁を銀色塗料(ビニラック)で仕上げ徑二尺の鳳凰模様のステンドグラスはめ込み丸窓を設けて採光に利し、新樣式の須彌壇を作り、本堂下を通路として「行道」の行えるようにした。

⑥内陣天井中央は折上格天井、内陣、兩位牌堂天井白色プラスター仕上げ、中ノ間天井はソフトテックス張り、薄オリブ鼠色水性ペンキ塗、兩脇ノ間ソフトテックス生地外陣天井中央はセミハードテックス、兩側はブラトン(木毛板)張り薄オリブ鼠色水性ペンキ仕上、内面壁プラスター(薄クリム色)仕上げ、廻しぶち、さをぶちは

栗皮色(格天井は黒色)、内部欄間及び表面扉はカーキ色系の黄檗染(何れもビニラック)。外装正面、獨立圓柱及び正面壁面(格子模様)の薄クリム茶又は薄香色系と入口四本柱型の青龍山テラゾー貼り、と扉の配色とは特に意を注いだ。中の間外陣の間の二本の圓柱は黒色ビニラック仕上げ豫定。

⑦音響の調節は天井用材によつて配慮したつもりだったが、尙下陣天井には鳴龍を生じた。しかし全體として反響の具合は非常によく法要も嚴肅味を増し、又、レコードコンサート、琴演奏會、三曲會、素談會、舞踊會等を開催した限りでは何れも成功を収めていた。

浄土編輯部編

信徒 必携

一部 十圓
八圓

藤井實應著

一枚起請文

一部 十圓
八圓

實相 寺編

浄土日用勤行式

一部 廿五圓
八圓

佛典
童話

馬と驢馬

内山 憲 尙

昔、あるところに一匹のろ馬がおりました。このろ馬は大變賢こいろ馬でした。ろ馬は考えました。

「僕は、顔も形も、耳の長いところも足の細いところもしつぽも馬にそっくり似ているけれども、馬の様に早く走ることが出来ないから、他の動物や、人間たちに馬鹿にされるのだ、御主人からも馬鹿だ馬鹿だと云われるのだ。僕だつて、一生懸命に勉強すれば馬のように早く走ることが出来るだろう」

ろ馬は、その家に飼われている馬のところへ行きました。

「馬さん、お願いがあるんだが聞いてくれまいか」

「何んだい、お願いというのは！」

「實は、僕は、のろまだとか、足がおそいとか云つてみんなに馬鹿にされるんだ、何とかして馬さんのように、早く走れるようになりたいから、馬さんの通りにやらせて貰えないかね、馬さんが走れば僕も走る。馬さんが歩けば僕も歩く、馬さんがたべれば僕も食べる……なんでも馬さんの通りにね……」

「ろ馬君、君、大丈夫出来るかい！」

「あゝ、きつとやるよ……ね、お願いだから……」

ろ馬があまり熱心にたのみますので、馬はそれを許してやりました。

この話を聞いた、ろ馬の友達は、笑いました。

「馬鹿だな、どんなにしても、馬は馬、ろ馬はろ馬だよ。ろ馬が馬と同じようになろうなんて考えるは馬鹿なことだ、どんなにあせつても、われわれは馬にはなれつことはありやしないよ……」

ろ馬は友達から、あざけられても笑われても、少しも氣にしませんでした。

翌る日から、ろ馬は馬の後からついて、馬と同じような生活を始めました。食事をする時は一緒にやり、歩く時は一緒に歩き、走る時は一緒に走りました——ただ走る時のつらさと云つたありません。馬にまけないように、おくれないうちに後からついて走るのは全く命がけです。

息は切れる、死にそんな思いをして、フウフウいい乍

らも我慢して、馬の通りに走つていました。

一年、二年たつうちに、だんだんとなれて来て、早く走れるようになり、もう、どんなところへでも馬と一緒に走れるようになりました。

三年目にはすっかり馬と同じように、早くかけ出せるようになつてしまいました。馬は申しました。

「よくやつたな、初めは、續くかと思つていたが、毎日苦しいのを我慢して、よくつとめたね、すっかり僕と同じになつてしまつたよ」

主人も大變によろこんで、他の馬と同じような立派な馬小舎に入れ、おいしいものをたべさせて可愛がりました。

初めに笑つた、友達のろ馬たちはいつまでも、うすぎたないろ馬の小舎の中でまづいものをたべて、みんなにのろまのろまと云われて笑われていました。(生經より)

顔尊の戸の津

一人上人然法—
—人々るめぐ



雄昌侯小

○爲守 吉水に元祖を訪ふ

武藏國の住人、津の戸の三郎爲守（尊願）は長寛元年の生れで、十三才のとき治承四年八月頼朝公が伊豆の石橋山に兵を擧げるや之

に馳せ参じ、戰破れて頼朝が一時安房國へ逃れたときにも亦從つて居り、その後の平家追討の戰にも加わり、あつばれ鎌倉の家人として功勞のあつた人でありすが、後に述べますやうに、やがては元祖上人の門に入つて法名を尊願と稱へ、八十才を以つて往生の素懷を遂げて居ります。

爲守が元祖上人を吉水の庵に訪ねて、親しく淨土の教を受けましたのは建久六年三月の事で、元祖六十二才、爲守三十三才の時であります。

當時、爲守は鎌倉の家人として、頼朝公がさきに平重衡のため焼かれた東大寺大佛殿再建成就の落慶法要に参列するため多くの家人を率いて上洛した中に加はつてゐましたので、三月十二日東大寺に於ける式典も無事にすんだその月の廿一日、京都滞在中を良い機會に、かく上人をお訪ねしたのでした。

その頃既に元祖上人の御聲望が高かつた事は申すまでもありませんが、折から目のあたりみて來た大佛殿再建の中心人物たる俊乗房重源その人が元祖を師と仰ぎ、自ら弟子の禮をとつてゐた事は、いやが上にも元祖上人を隠れもな

い人にしてゐた事と想像出來ますし、他の記録によりますと畠山重忠も亦爲守と前後して元祖上人を訪ねてゐるといふ事ですから、他にも吉水の地を訪ねた武士は多かつたのではないかと思はれます。

ねるに至つたのでせうが、そこには亦、既に元祖の門に入つてゐた熊谷蓮生房のかねてからの強い勧めがあつたからだとも思はれます。

事實、爲守が入信後の行跡について、熊谷蓮生房と並べて論議されてゐる事もあり、元祖上人がお亡くなりになつてから後は共に西山の善惠房證空上人を頼つていろいろ疑問の點などを説き明かしてもらつて居りますし、それに同じ武藏國の住人なのですから二人の間に交渉がなかつたとは思はれませんし、かの同じく坂東武者にして元祖上人の門に入つた宇都宮彌三郎頼綱について

頼綱、家子郎徒濟々として武藏野をすぎけるに熊谷の入道ゆきあひていふやう

いみじく大勢にておはするものかな。但しいかにおほくとも無常の刹鬼はふせぎがたくや侍らん。彌陀如來の本願にて、念佛するものをば、惡道におとさず迎へとり給へば、一人當千のつはものにもなほまさりたるは、これ念佛なり。かまへて念佛し給へ、と申しける

と傳へられてゐる話は、そのまゝ爲守の場合にも亦あり得ることゝ思はれるからです。

○爲守 發心のいきさつ

このやうに元祖上人の御聲望と相俟つて、熊谷蓮生房の勸進があつたにせよ、爲守自身の生活の中に、やはり之に應ずる、何かしら救ひを求めずにはいられない不安定なものがあつた事も事實であら

うと思はれます。

それについて先づ考へられる事は、爲守自身が元祖上人の前で、「合戦度々のつみを懺悔して」居ります様に、生々しい戦ひの記憶とそれに伴ふ悔恨の念からのがれたいと思ふ心であります。

戦に敗れた者が、例へば重衡のやうに、この世に於ける一切の希望をうちくだかれて、今は唯、み佛にすがる他に頼るものがないといふ絶對的な絶望から信仰に入るのは自然のなりゆきと申せませうが、あつば坂東武者として戦場を驅馳して戦功をあげ、その時は敵の首級を誇らしげにかゝげたものといへども、戦の終つたあと、少しでも生活が落ちついて来るならば、やはりそれは心を暗くすることこそあれ、いつまでも心持良い思ひ出とはなり得ないでせう。

熊谷蓮生房は世にある時、典型的な武人として功名手柄を求め、この世の出世を願ふ以外考へない人ではありましたけれど、かの一の谷の合戦で、わが子小次郎と同年の若き平家の公達敦盛の首を圖らずも打ち取つてしまつた事から、やがて打ちつ打たれつする武士の世界の救ひやうのない空虚さを厭ふて、元祖上人の下に歸入するに至つたのですが、——爲守といへども、かゝる劇的な事件こそ無けれ、永い合戦の間には自から殺めた人の數も多いこととせうし、例へそれが平清盛をして「大方發すまじきは弓取の青道心にて有けり」と言ひ放たしめてゐるやうに武士として氣に懸けてはならぬ事であつたにせよ、一たび一個の人間として自らを省みるに至るならば、自つと悔恨の念涌き起り、亡き人の菩提を弔ひ自らも亦救はれる道を求めるに至るのは蓋し當然の事といへませう。

それに當時は鎌倉幕府による武家政治といふものが漸く緒についたばかりで、舊い秩序は壊されても新しい秩序は未だ確立されずかの熊谷連生房のやうに領地についての紛争が多く、しかもそれに對する幕府の公正な處置も中々行はれぬまゝに、或は「幕下將軍をうらみ申す事ありて心をこし出家」をしたり、或はさきの宇都宮頼綱のやうに、元久二年彼が謀叛を謀つてゐるといふ風説を立てられ、そのために幕府からは小山朝政をして糾問せられ、起請文を進めて無實の由申し開きをいたしましたけれど、結局わづらわしさを厭ふて出家したものもあります。

爲守の場合とても、石橋山以來の生死をかけての半生を思ふ時、青雲の希望が大きかつたであらうだけに、與へられた現實に満足出来るはずも無く、さりとて不満のもつて行き處もない氣持はさぞやりきれないものがあつたらうと思はれます。

そして爲守入信後といへども、人を集めて不斷念佛を行へば

爲守は聖道の諸宗を謗じ、専修念佛を興すよし、元久二年の秋のころ、征夷將軍にあらぬさまに、讒し申すものあり

このために鎌倉に呼ばれて信濃前司行光から吟味をうけ、申し開きをして居る状態で、爲守の周圍が如何にうるさかつたか、想像出來かうした世間への不信の念が、やがては心の救いを求めて元祖上人を訪ねるに至る、大きな機縁になつてゐると申せませう。

○爲守としら信じの念佛

爲守はかくして元祖上人から、親しく「念佛往生の道をうけたま

はりて」惡人は惡人乍らに救はれるといふ悦びに「但信稱名の行者」となつて郷里に歸り、尙未だ幕府の許がないので出家こそしませんでしたが、自ら行じ、他をもすすめて、「専修念佛の行人かの國に三十余人」を數へ、元祖上人からも

まめやかにあはれに候 京邊などのつねにきくならひ かたはらをもみならい候ぬべき所にて候にだにも おもひきりて専修念佛する人は ありがたきことにて候 これひとへに御ちから又熊谷の入道などのゆへにてこそ候なれと稱讃されて居ります。

その後さきにも觸れましたやうに元祖上人の門下淨勝房や唯願房と共に不斷念佛の別行を行ひましたり、亦特に乞ふて元祖上人から戒本十重禁の次第や上人抄記の三聚淨戒のむねなどしるしくだされ、又袈裟や念珠も乞ひうけて、尊願といふ法名もこの時元祖から頂き、益々出家のおもひをなして念佛にはげみ、建保七年正月將軍實朝が、鶴岡八幡宮の社前で刺されて非業の最後を遂ぐるや、二位禪尼の圖らひでその遺骨をうけて、ひたすらその菩提を弔ひ、且つその折に始めて出家を許されましたので、家督を子息民部大夫守朝にゆづつて、但信稱名の生活に入つたのでした。

かくして、元祖上人配流の報に接するや遙かに慰問の書を送つて安否を問ふ程の元祖一邊倒の人でありましたから、仁治四年正月十五日元祖と同じ八十才での往生を期して割腹し、高聲念佛を唱へつつ、異常な最後の中にも靜かな往生を遂げたのであります。

しかし三十三才の入信から八十才の往生までの永い間には、信行

の上に心の動揺もあり、とりわけ、しら信じの念佛に徹し切る事が
中々出来なくて、一部の人から

熊谷の入道 津戸の三郎は無智のものにて 餘行かなひがたけ
ればこそ 念佛ばかりをばすゝめ給らめ、有智の人には かな
らずしも念佛にはかぎるべかず

といはれては不安になり、その都度元祖上人に教を乞ふて居られる
のですが、むしろそこに、現代の私達に共通する人間的な弱さがす
なほに表現されてゐて、時代的に距りがあるにも拘らず、私達の心
に直接うつたへるものがあります。

勿論元祖上人が、

阿波介も佛たすけ給へとおもひて南無阿彌陀佛と申す。源空も
佛たすけ給へとおもひて南無阿彌陀佛とこそ申せ 更に差別な
きなり

と教へられて居りますやうに、彌陀の御本願によつて救はれるので
あれば有智無智の別は問ふ處ではなく、み佛を信じ稱へる心の深さ
が根本でなければならず、最後は御本願を信ずる、しら信じの念佛に
歸一するのでありますが、私達とはかく元祖上人のやうな求道と選
擇の道を通らねばお救ひが頂けないやうに思ひ勝ちで、そこに爲守
の一抹の不安も亦あつたといへましよう。

しかしかうした苦惱を通して、津の戸の尊願・三郎爲守がその永
い生涯を稱名三昧のしら信じの念佛に生きぬいた事は、やはり尊い
事であつて、私達としても大いに教へられる處と申せませう。

新年の和歌

上木 彙葉抄

一つもて君をいははむ一つもて親を祝はむ二もとある
松 落合直文

春ここに生るる朝の日をうけて山河草木みな光あり

佐佐木信綱

過ぎゆける一年のつかれいでものか元日といふにう
とうと睡し 石川啄木

新しき年立つ今日を廣き見む遠き望まむと家出でつ我

窪田空穂

賀 正

横濱市

良 忠 寺

住職 森 本 祐 賢
副住職 森 本 祐 堂

川崎市

東明寺

吉岡了綱

三 番 叟

梅 津 和 夫

「天の岩戸の、今日ぞ開くるその初舞臺、千代萬代も、

花のお江戸の、とつばひとへにお取立、おこがましく

もお目見得を、ほんに鵲の眞似からすとび。

「三番叟」と言へば、正月とか何かのお祝ひ事のある時には、なくてはならない所作事です。「三番叟」について何も知らない人でも、その名前を聞いただけで、お芽出たい踊りだとすぐ解かるのは、「三番叟」の持つてゐる性格が、他の色々な祝儀物の狂言や踊りよりも、遙かに高い一つの格式を備へてゐるからです。

それは「三番叟」の源が、昔ベルシャで行はれた新年の舞踊で、それが支那に傳はつて我が國に入つて來たのだと言はれてゐるもので、あの翁の面は白色人種を、千歳の素面は黄色人種を、三番叟の黒い面は、黒色人種を象つたものださうですから、單に我が國だけではなく、世界のあらゆる人々の幸福と平和とを祈つた、大きな宗教的意味が、この踊りの中に含まれてゐる事から言へる譯です。歌舞伎に出てくる「三番叟」は、すべて能

の「翁」から取り入れられたものです。本家の能でも、「翁」はきはめて神聖な儀式物として、舞臺に立つものは、皆精進潔齋をして演じたもので、昔は演能の始めには、必ず毎日これを演ずる習慣になつてゐました。この能の「翁」が、次第に歌舞伎の世界に入つてゆくと「三番叟」として、やはり祝儀式に取り入れられ、顔見世とか初春興行とかに、大夫人が翁に、若大夫が千歳に、座頭が三番叟に扮して舞臺を勤めるのが、吉例となつてゆきました。

しかし歌舞伎舞踊としての「三番叟」は、能の「翁」をぐつと大衆的に砕いたもので、翁や千歳よりも、題名のごとく、三番叟に中心が置かれてゐるのが特色です。これは重々しく固苦しい翁よりも、滑稽味と輕快さとを帯びてゐる三番叟の方が、町人の劇として發達してきた歌舞伎にとつては、親しみが持て

たからなのでせう。この様に能の「翁」が完全に歌舞伎化され、獨特に書替えられていつたので、看客に非常な親しみと興味とをもつて迎へ入れられ、それ以後、何十種と言ふ澤山の「三番叟」が次々に作られ、曲もあらゆる淨瑠璃に作曲されてゆきました。

その舞は、先ず翁舞があり、次に千歳が舞ひ、三番目に三番叟が舞ひます。つまり三番叟とは、三番目に舞ふ老人と言ふ意味ださうで、直垂に侍烏帽子をつけ、それを更に劔先烏帽子に冠り替えて、笛、大鼓、小鼓の囃子につれて扇を持つて舞ひます。この始めの方を揉の段と言ひ、次に黒の尉の面をつけて、扇と鈴を持つて舞ふ鈴の段の、二つの部分に分れてゐます。今でも「式三番」を初めとして、「雛鶴三番」「種蒔三番」「子寶三番」「二人三番」「操り三番」「舌出し三番」等は代表的なものとなつてゐます。

その中で、近頃最も數多く上演されてゐるものは、「操り三番」と「二人三番」です。それはこの二つが、十數種に及ぶ「三番叟」の中でも、最も一般向に、興味本位に技巧が凝らされてゐるからです。「操り三番叟」は長唄の囃子につれて、三番叟を糸操りの人形として扱ひ、それを又人間が踊らうと言ふ仕

組で、操りの糸が絡んだ心で自由を失つたりくるく廻つたり、糸がぶつりと切れた心で、思ふ様に踊れなくなつたりして、誰が看ても面白い、奇抜な趣向に終始してゐます。又「二人三番叟」は、二人の三番叟が、初春の壽を祝ふ爲に舞つてゆくうちに、一人は次第に舞ひづかれ、一人がそれを助けながら、振

り面白く舞ひ納めます。この二人の三番叟が絡み合ひ、纏れ合ふリズムは、いつ看ても心よい快感を與へます。それは十分に近代的なダイナミックな魅力を持つてゐると同時に、義大夫による巾のある音聲と、太棹の三味線の場内に響き渡るポリュームの大きさが、長唄やその他の繊細な味とは、又違つたよさを持つ點にある事も見逃せません。この「操り三番」と「二人三番」とは、いはゞ「三番叟」の大衆版と言へるので、理屈を忘れて、唯恍惚としてみとれ、全體を覆ふユーモアの素晴らしさに酔つてしまふのです。

この様に「三番叟」は、歌舞伎舞踊として獨特の發達を遂げました。澤山ある色々な「三番叟」は、それ／＼異つた味はひを持つてゐます。しかし翁は天下泰平を祈り三番叟は五穀成就を願ふ主意には、何らかはりはありません。おそらく毎年、正月とか或はお祝ひ事のある時には、必ず上場されて、舞臺を淨めてくれませう。

「三番叟」とは、それ程お芽出たい芝居であり、これから先、千年も萬年も上演されてゆく事でせう。

(寫眞は「操り三番叟」猿之助の三番叟段四郎の後見。)



北邊の開教 (2)

石 上 博 應



(三)

安東氏時代に正行寺と光善寺が創建されて、わが浄土宗の道南地方教團の根がおろされたことは前に述べましたが、松前浄土宗の始まりとされている正行寺は、永祿十年松前藩主蠣崎季廣の時に、毎年取引のため松前にやつて来る淡路屋丹下（前掲丹後屋は誤り）という商人が、松前に出入する商人や船頭達の勸進を仰ぎ、寺地を願つて建立、本尊は佛師春日の作で、永祿十一年に丹下の叔父某のいた淡路の某庵から勸請安置したものだと伝えられております。

正行寺は創立以來、屢々祝融に遭つていますので、資料焼失して詳しく知ることは出来ませんが、舊記に永祿十年に沙門笈西が正行寺を建立し、同十一年に春日作の佛像を安置し、萬察和尚の時、即ち元祿十四年に、知恩院の末寺になったことが書き残されてあります。

す。

次で十數年後の天正三年に、光善寺が創建されたのでありますが、光善寺は初め高山寺と號し、沙門須譽によつて建立され、慶長七年良故和尚の時、光善寺と改稱し、京都百萬遍の忍教寺の末寺になりました。

(四)

安東氏時代は上掲の二寺が、主として道南の各地に教線を布いたものでありますが、次の前松前氏時代になりますと、正行寺並びに光善寺によつて、道南各地に寺院、佛堂の建立を見たのであります。そしてこれらの寺院、佛堂は概ね兩寺の支配をうけ、或は末寺として建立されたものであります。

この松前氏というのは、天正十八年、松前慶廣が上洗した時から、寛政十一年松前章廣の代に、幕府が東蝦夷地（北海道の東海岸）を上知するまでの二百九年間を指していうのでありまして、此の時代にはわが浄土宗ばかりでなく、各宗とも道南各地に寺院佛堂の建立が目立つて多くなりました。

わが浄土宗では、正行寺を本寺とするものに

福島村に 法界寺 寛永七年創立。

乙部村に 西念寺

寛文十二年の建立であるが、一説には萬治三年の創建とも伝えられています。

吉岡村に 吉岡庵（今の海福寺）

貞享二年建立。福山秘府には正徳四年正行寺の察玄和尚が建てたとあり、また元禄六年各十月の記録に道心高庵が、正行寺をして、吉岡に庵地を願はせて庵を設け、光念庵と稱していたとも出ている。

江差村に 彌陀堂（今の阿彌陀寺）

延寶三年の建立になつてゐるが、一説には明暦年中の創建ともいはれている。

熊石村に 熊石庵（今の法藏寺）

寶永六年江差の彌陀堂住職の直雄和尚が、勢至堂として創建したものであります。

(五)

次に光善寺を本堂とするものには

上ノ國村に 上國寺

これは寶永二十年に建立。

上磯に稱名寺

正保元年の建立で、元禄三年に箱館の現在の位置に移轉。

西館に 欣求院

慶安元年の創立、一説に正保二年の創立とも伝えられている。

江差村 觀音堂

元禄二年各十月豊後國來迎寺弟子道心寂了が建立して、同三年夏六月光善寺の末寺になつたと伝えられています。

此の外庵、佛堂の建立されたものが、相當あつたが、大體以上のような、念佛道場が西海岸の各地に建立されて以來此の方面の人々は法雨に浴することが出来るようになったのであります。（つゞく）

新様式寺院の設計（公民館風なもの）

全體の構想は公民館として建築物それ自體が地域的公共的利用に供し得るようにとねらう。勿論寺院本來の姿は信仰中心であり、信仰の場所とし相互の信仰を深めてゆく道場たることが大切でしょうが、一方に於て大衆の會所として役立つて來たのが在り方の一面だつたと思います。それが現今では會所としても遠ざかりつつあるのではないかと思はれます。それを破るためあえて公民館風な利便を考えた。（中村庫隆）

美男におわすみ佛



今井宇三郎

音羽の護國寺の近傍に住んで二十年、散歩するとすればその境内か墓地に限られる。その幾百度かの往還に、^{いしだた}磴を上下するが、登りつめたあたり、朱の不老門をくぐると、右手に露坐の大佛が、本堂の緑青の甍を背景に結跏しておられる。朝には朝日に映えてプロソズの膚を輝やかし、夕には夕陽を受けて右肩から左腋にかけて幽玄な法衣をまとう。春夏秋冬を通じて、色々に變貌するみ姿は、ゆらく線香の煙と共に、凝視める人々の眼に限

りなきニュアンスを漂はせるであらう。ある時、ふと疑問に思つたことは、興謝野晶子の歌に、み佛なれど美男におわすと歌いあげられた美男のことであつた。

み佛の相貌があらゆる徳を圓滿に具足しておられるであらうことについては、恐らく經典に多くの修飾語を發

見できるのであらうと容易に想像される。たとえば先日見た維摩經の中にも、尊顏の象徴たる目を修飾することばに、目は淨く修廣にして青蓮の如しとあつたのを思い出す。天然の青蓮華は、その葉が^{はな}修くして廣く、表の青と裏の白とがはつきり分れている。この青蓮のような目をしているのは大人の相であると注釋に見える。まだ十分に開き切らない若葉は前後の部分が巻いている。その舒びきらない相をもつて、佛の慈眼を形容したものではな

いかと思われる。聞けば三十二相、八十種好と稱せられている由、試みに識田さんの辭書を見ると、三十二の瑞相を示しておられ、その名も明記されている。八十種好はそれを更に細分されたものらしい。然し遂に美醜の概念で表現されたことばを發見することはできなかった。三十二相は佛に限らず、すべて大人の相に通うものであるらしいが、これはいずれも瑞相であつて、美醜の觀念とは違ふ。少くとも美男醜男の概念とは異質的であると思われる。然らばみ佛に對して美男の稱號を奉つたのは、晶子女史を以て嚆矢とするものではなからうか。他には寡聞にして知らないし、二、三の知友に聞いてもまた同様であつた。

護國寺の大佛を拜して美男なりや否やの疑問を感じたのは、平素から美醜の觀念では律しきれないものを感じていたからであらう。それは釋迦牟尼を法身佛として表現し禮拜する人々に通じたものであらう。ロゴスの表現としてのみ佛は超人間的的存在であるはずである。それを人間的存在に見られる美男美女の概念で律せんとするところに異質的なものを

感じたのに違いない。晶子女子は超人間的存在を人間的存在に於て眺め、かしこくも人間的表現を奉つたのである。それは男性にして美しき人、即ち美男子として詩人に感じられたのであろう。その時、女史は美しき女性であつたであらう。いずれにしても、鎌倉やというのだから、鎌倉の露坐のみ佛を一見しなければ何とも申されないことであつた。それも夏木立の青葉若葉のころに見るのが一番ふさわしいのである。

ところが、先日、二日續きの休みを利用して氣のおけない人達ばかりで、一日鎌倉に清遊した。十一月であるから夏木立には遠いが、



それでもお天氣には災されなかつた。稻村ヶ崎に近く、海風が輕塵を捲くありさまであつたが、十分に拜むことができた。そこで美男のことが思い出された。仁王門を入つて、早くも晩秋の空に往來する白雲を背景に扶坐されてゐる大佛の姿が拜せられる。いかにも豊かな安定した感じである。同行のカメラマンが大佛様を背景に二、三段の石段の所で撮つてくれる。こゝから撮るのが、もつともよい位置らしく、カメラを持つて參拜に來た人達も皆そのようにしている。人間の身長と佛様の高さとの釣り合いが、カメラの位置をそのあたりに決定するのであらう。

しかしその位置から眺められるみ佛は、慈悲の眼を垂れて衆生を憐み賜う御姿として、護國寺の大佛様と大して相違はない。自分は何の氣なしに、歩を運んでみ佛に近づき、須彌壇の下に立つて拜し、仰いで佛眼を凝視した。青蓮の慈眼は正しく拜する者に垂れてゐるではないか。佛様の眼は半眼に開いて正面を見ているものであると、漠然と思つていた者にとつては驚異の發見であつた。更に眼を轉じて佛顔に及んだ時、護國寺の大佛に見ら

れないものを見た。兩頬の豊かさである。いかにもふつくらとした頬の肉付きである。むしろ咽喉に流れる線が不自然に見えるまでの兩頬の垂れた豊かさが感じられる。ここに女史の感覺的印象が刻まれたのではなかつたか。美男におわすと、奇しくも歌つた詩人の感覺が、こんな所に動いたのではなからうか。

この小さな發見が、心楽しい友だちばかりの小旅行という氣分によつて、一層子供らしい楽しさにまで引き上げられたと見える。早速、友だちにはもちろん、お供した先生にまで誇らしげに報告に及んだ次第である。この報告を聞いて、なるほどと肯定してくれたようでもあるし、そうでもないようでもある。た。慾目には前者が多數であつたと思つた。他愛のない話である。

鎌倉には度々行つたが、大佛様を拜んだのは始めてだと言つたら、案内してくれたY君に笑はれた。青葉若葉のころに、もう一度來ないかと言つてくれたが、心のび、氣安らかな一日の挿話であつた。

(東京教育大學教官)

(昭和二十八年十一月)

小消息講義 (一)



佐藤賢順

小消息

末代の衆生を、往生極樂の機にあてゝ見るに、行すくなしとても疑ふべからず、一念十念に足りぬべし。罪人なりとても疑うべからず、罪根ふかきをもきはじとの給へり。時くだれりとても疑うべからず、法滅以後の衆生なおもて往生すべし、況や近來をや。我が身わろしとても疑うべからず、自身はこれ煩惱具足せる凡夫なりとの給へり。十方に淨土おほけれども西方を願うは、十惡五逆の衆生の生るゝ故なり。諸佛の中に彌陀に歸したてまつるは、三念五念に至るまでみづから來迎し給ふ故なり。諸行の中に念佛を用ゆるは、かの佛の本願なる故なり。いま彌陀の本願に乗じて往生しなんに、願として成ぜずということあるべからず。本願に乗することは信心の深きによるべし。うけがたき人身をうけてあひがたき本願にあひておこしがたき道心を發して、はなれがたき輪廻の里をはなれて、生れがたき淨土に往生せんこと悦の中の悦なり。罪は十惡五逆の者も生ずと信じて、少罪をも犯さじと思ふべし、罪人なお生る、況や善人をや。行は一念十念なほむなしからずと信じて、無間に修すべし、一念なお生る、況や多念をや。阿彌陀佛は不取正覺の言を成就して、現に彼の國にましませば、定で命終の時は來迎し給はん。釋尊は善き哉、我が教に隨て、生死を離るゝと知見し給ひ、六方の諸佛は悦ばしき哉、我が證誠を信じて、不退の淨土に生ると悦び給ふらんと。天に仰ぎ地に伏して悦ぶべし、このたび彌陀の本願にあふ事を。行住坐臥にも報すべし、かの佛の恩德を。頼みても頼むべきは乃至十念の詞、信じて猶信すべきは必得往生の文なり。

上人の手紙

手紙というものには書く人の人柄がよく表れるものです。一人と一人の直々の應對ですから、何か問われたことに對しては、イエスカノーか、はつきりと答えなければならぬ。難しい論證や説明は抜きにして、そのものずばりと答えなければならぬ。手紙にはその人の息吹が感ぜられます。鎌倉時代以後、消息文學が高く評價せられるのは理由のあることです。

法然上人には數多くの消息類があつて、有難い事に、凡そ二十通以上が現存しています。それらは上人滅後百年頃に編集された「勅修御傳」や「和語灯錄」(了惠道光編)の中に收められています。中でも小消息、大胡消息おほこしは一枚起請文とともに、三消息として大切にせられています。小消息は「勅修御傳」では第二十一卷に「上人つねに仰せられける御詞ごことば」の中に、「又一紙にのせての給わく」として記されていて、詳しくは一紙小消息といわれています。又、「和語灯錄」には、第十四卷に「黒田の聖人へつかわす御文」として載せてあります。この二つは多少文字の違いがありますが、意味においては少しも變りありません。

ところでこのような結構な手紙を頂いた黒田の聖人とはどんな人でしようか。勿論、門下の一人でしようが、詳しいことはわかりません。徳川中期の學匠である義山がいろいろと考證しましたが、黒田とは伊賀國名張郡錦生村にある地名で、その出身の聖人であると

いうことです。例の奈良東大寺大佛の再興のとき、法然上人に代つて大勸進の役をつとめた俊乗房重源が、宗祖門下の一人でありますから、この人ではないかという説があります。黒田の聖人というほどですから、門下といつても門下中での長老であることが察せられます。

一枚起請文と小消息

朝夕に讀む御法語のうちで、小消息よりももつと一般に知られているのは、一枚起請文です。この二つを比べてみることは、それぞれ特色があり意義があつて、興味の深いことです。今も一枚起請文は三部經と同じように大事にされて、朝夕のお勤めにはお經のあとで必ず讀まれています。これは中世以來のことのようです。他の宗派や教團に對して淨土教團が固まりかけてきたときで、宗團の意識を一層強くする必要から、宗祖の御遺訓ごいじゆんをして、唱和することになつた模様です。もとは一枚起請文とはいわず、一枚消息とか御誓ごせい言ごんの書とかいつたのです。これは法然上人が建暦二年正月二十三日に、すなわち八十才で御入滅の前々日に、常隨十八ヶ年に涉つた弟子の勢觀房源智に賜つた御自筆の消息であるとされております。これを賜つた時の情景は、勅修御傳の記すところによると、誠に劇的です。上人の御終焉の時が近ずいたので、勢觀房は、日頃念佛のことについてはお教えを承けておりますが、なお御自筆で一筆、大切な點をお書き遺し下さい、のちのちの御かたみいたします、とお

願いをしました。その時の遺訓が一枚起請文であつたとされており
ます。誠にこの法語は、上人八十年の生涯の學問研究と人間深求の
結晶であり、思索と修行との歸結であつて、キリスト教徒でさえバ
イブルの山上の垂訓に比し、文學者でさえわが國文學史上の最高峰
と讀えています。しかしそれは上人の臨終に際して、突如として語
られた言葉ではないのであります。實はそれと殆んど同じ言葉が、
十年近くも前に、或はもつと以前に他の弟子にも傳えられていたと
考えられるのです。というのは、二祖聖光房辨長（俗に鎮西上人と
申す）の筑紫物語集には、大體同じ文章のものが載つているところ
を見ても、辨長が上人から授つて九州へ歸つたことが察せられます。
辨長が宗祖のもとを辭して鎮西へ歸つたのは、宗祖が七十二才の時
ですから、その頃か、或はそれよりも遙かに、早くこのような言葉
は宗祖のお心のうちに熟し、時によつて弟子達への消息として書か
れたのかもしれませんが。突如として臨終に語られたのでなく晩年の
十年間を通じての、思想も信仰も圓熟した時期の法語であるとすれ
ば、一枚起請文の意義を價值とはいよいよ高く尊くなるではありま
せんか。

これに對して、小消息はいつ頃の書簡か全くわかりません。しか
しその内容からいつてよほど晩年のものであると思われまゝ。と
いうのはこれほどのぬくもりを持つた手紙というものは、年の數も
重ね信仰も深まつた人でなければとうてい書けないからであります

小消息は讀んでいゝうちに朗々たるリズムに引き入れられてしま
います。自分で讀みながら自分の聲のはずむのに引きずられていきま
す。信仰の論理とでもいゝますか、一種の力を持つた論理で疊みか
けてこられるのを感じます。しかしそれでいて少しも理屈ばつたり
冷たい感じがしたりする所はなく、全體に暖い愛情がにじみ出てい
ます。あの名高い一句「罪人なおもて往生す、いわんや善人をや」
という一段なども、勢觀房の日記や親鸞の思想などを思い合せて、
善人惡人がしばしば問題となつた晩年のお考えの表れであると思わ
れるのであります。

一枚起請文を讀むときの感じはいつも叱られている時の感じで
す。初冬の朝の霜のきびしさです。小消息から受ける印象は慈愛の
ぬくもりです。春近き頃の日ざしです。一方は修行のきびしさ、一
方は信仰の暖かさでしょう。いずれが勝つていゝともいづれが劣つ
ていゝともいゝません。行と信と一つになつてこそ、宗教生活の全
き姿が現れるのであります。

一枚起請文の講義をしたり註釋をしたりした本は澤山あつて、足
利時代に傳通院の了譽聖阿や増上寺の西譽聖聰が講述を書いて以來
現在まで註釋書は恐らく百種以上にも上るでしょう。徳川時代のも
のだけをざつと數えても四十種位はあります。しかるに小消息の講
義はごく僅かで、三、四種しかありません。徳本行者の門下で蝦夷
善光寺の住僧、覺洲（おんしゅう）の「小消息講録」三卷と、大日比西圓寺の法洲（おほひ）

の「小消息講説」二巻はともに天保時代のものです。明治四十二年に中島勸瑋の「小消息講義」がありますが、これは法洲の「講説」に依つております。時代はかなり隔つていますが、法洲の「講説」にはそれなりの面白さがあつて、中々に捨てがたいのです。しかし當時と今とは學問の方法も違つていますし、時代の關心も全く違つていますから、私は直接法然上人から、今の混迷した時代に健やかに楽しく正しく生きるための灯明となる教えを、探し求めようと思ひます。

小消息の主題

小消息は長さからいつて、一枚起請文の約一倍半あつて、そのうちには淨土の教えの重要な事柄のすべてが含まれていきますから、これを初めから終りまで一字一句お話しすることは、限りある紙數と回數とはとうていできません。また同じ事柄が二度も三度も繰返えされていて、お話しするとなると煩わしいことになるので、問題を全篇にわたつて整理すると、大體、次のようになるでしょう。

一、時代意識、すなわち宗教に生きる人の歴史觀。

二、實存の探求、すなわちあるがまゝの人間の姿を捉え、その力を見極めること。

三、罪惡觀、とくに善と惡、倫理的生活と宗教的生活、人と人との關係から人と如來との關係へ。

四、本願への信順、すなわち信仰の世界の風光、法悦と感謝の日常生活。

五、往生極樂、極樂とは何か。

これらの主題をお話の觀點として、お話しを進めていきましよう。その前に一言、説明しておきたいことが一つ二つあります。初めから數行目に、「罪根ふかきをもきらわじとの給えり」とありますがその「の給えり」とは誰が言つたというのでしうか。これは唐の法照禪師のことで、禪師の「淨土五會念佛略法事儀讃」という本の中の「彼の佛、因中に弘誓を立てたまう、名を聞いて我を念ぜは總て來迎せんと。貧窮と富貴を將てるとを簡ばず、下智と高才とを簡ばず、多聞と持淨戒とを簡ばず、破戒と罪根の深きとを簡ばず、たゞ廻心して多く念佛せば、よく瓦礫をして變じて金とならしめん」という一句の意味を表わしたのです。法照禪師は後善導といわれたほどの人で、五臺山に大聖竹林寺を創し、善導法の念佛を受け、五時念佛の淨土教を弘めた人です。宗祖が無量壽經釋の中で、この句を引用しているところを見ても、この人にいかに深い關心を寄せておられたかが察せられます。

なおその先に、「自身はこれ煩惱具足せる凡夫なりとの給えり」と、もう一つ「の給えり」があります。これは唐の善導大師のことで、善導の「往生禮讃」に、「自身は是れ煩惱具足せる凡夫なり。善根薄少にして三界に法轉し火宅を出でずと信知す」とある一句を引いたのであります。善導は宗祖が晩年になつてしきりに、偏に善導に依るとか、善導は彌陀の化身なりとかいつて、絶対に信順したその人であります。一應これだけの註釋を加えておいてから内容の説明に入りますよう。

今年は午歳で馬のように力強く
ありたいものと思ひながら、經典
を繙くとかかりの数が見られま
す。馬が水や草を念じて常に余念
がないように、大精進力を現じ、
大悲の方便で衆生のために一切の
魔障を摧伏し、後には動物を御事
問とされるようになった馬頭觀音
があります。又、本生經典には、
海邊で人を捕えて、その血肉を食
う姪鬼から、人々を救つた馬王(釋
尊)や、戦争に破竹の勢を示しな
がら、兩軍の王に平和的解決をさ
せ、戦争の愚かさを知らせた馬王
(釋尊)の話が傳えられておりま
す。これらはその一例に過ぎませ
んが、佛教東漸のきざしとして
名高い白馬寺の傳説を思い直して
見ましよう。

永平三年、明帝が或夜不思議な
夢を見ました。一人の金色の背の
高い、頭の周りに光明を放つてい
る神が、宮殿の殿前に飛び下りた
という夢です。不思議に思つてそ

の夢を占はしたところ、傳毅とい
うものが、それは天然の佛に違ひ
ないと申し上げました。そこで明
帝はそれに相違あるまいといつて
十八人の使者を印度へ遣わされま
した。彼等は中印度で、迦葉摩騰、
竺法蘭という二人の高僧に遇ひ、
中國に伴つて還つて來ました。法

馬と佛教……………石上善應

蘭は學徒のため後から洛陽に着き
ました。これが永平十年と傳えら
れております。明帝は二人が洛陽
の都に着いたのを喜んで、洛陽の
西雍門の外に精舍を建立しまし
た。この精舍が中國最初の寺院で
あります。ところが彼等が中國に
來る時に、白馬に經卷を負わせた

姥捨山の種となつたと考えられ
る内容が、雜寶藏經、法苑珠林に
出ておりますが、それには同じよ
うに二匹の馬を連れて來て、どち
らが親で、どちらが子であるかと
いう難問を出しております。これ
がやがて、大和物語・今昔物語・
打開集などに修飾されたものなの
でしょう。印度神話にあるヴィシ
ヌ神が梵天に頼まれて馬の首に
變つて吠陀を、東北に逃げた惡魔
から取り返した話は、密教で言つ
ている、「東北角に馬頭明王を畫
く」という馬頭觀音とは何か關係
がありそうに思われます。

梵語で馬の語源を尋ねますと、
進むとか速いとかいう意味から出
來たもので、勇壯なる駿馬を思わ
せます。語源は違ふとはいふもの
の同じ言葉に、食ふるといふ意味
があつて、鯨飲馬食を聯想させま
す。勿論、これはいけません。今
年こそ正しい道に勇壯に進む馬の
如くにありたいものと考えており
ます。

芝園だより

○あけましておめでとう。この欄から皆さんに新年の挨拶を送るのも、もうこれで何回。咲く花の色と香りは同じでも、眺める人の刻々に異なつて行く如く、本誌の讀者も大海原の潮路の如く、目に見えずとも大きく流れていること、思います。

小生も又、その潮にのつていつかは洋溟の彼方に消える運命を、今年も又一步進めたわけです。正月早々情無いく事になりましたが佛者としての心構えをちよつぱり御披露した次第。(竹中)

○平和を願はない民族はなく、安穩を求めない人はない。高らかな馬のいなゝきに明けたこの年は、「塞翁が馬」の如く「轉禍爲福」となるのであろうか、はたまた天驅けるペガサスから何かとたらされる年となるのであろうか。大海の一粟である私も、腹の底から「よき年を」と、何はともあれ切

望したい。

○小さな腕を撫して漕ぎつけて來た一年。今年も皆様の聲援で、大いに張り切つて行きたいと思ひます。宜しく。

○奥野信太郎先生が、中國文學者として、健筆を縦横にふるつて居られる事は、御承知と存じます。特に一筆頂き新發足の喝を入れて頂きました。

○賢順先生には、先年の一枚起請文に引きつゞき、小消息講義を願ひました。御期待下さい。

○淨土百人首は、新年のお楽しみまでに集めました。スペースの関係で、百人一首とはならず残念。

○久々に川田熊太郎先生に拜眉。

「毎度淨土拜見しています。所で永平寺まいりは、ちと永平寺が有難くなくなりますよ」と。御元氣な姿を拜したが、高説を聞く暇もなかつた。

○大村桂巖先生、近時お鉢の具合悪しく、御見舞に及んだとき、「いたつきの床に親しむわが身こそ、

宿世の業の報いなるらめ」と寄せられた。御快癒を祈念して止みません。(安居)

○正月は天下泰平を歌いたいのものです。しかし、年一年安定して行くように見えて、仲々不安は去りげにない。世界的であるだけに、絶對的なものだ。

○又、しかし、之に左右されず流されず崇高なる本會の目的を志向して編集を進めたい。注がれる有形無形の御聲援に對し、年頭、編集の一步前進を以つて應へよう。

○本年より「新しい行き方の寺院」等の、脱皮する傳統佛教の姿を會員各位と共に紹介し研究して行きます。

○年賀廣告に多數御参加下され本號を賑やかにして頂いた。

○トラクト信徒必携は説教講話のテキストとしては好評で、なぜもつと廣く知らさぬかといふ人もある。

○前號吉田のり子氏は寺田豐子氏にて訂正します。(龍海)

二月號豫告

吉田絃二郎

長壽法と放屁

石橋誠道

小消息講義(二)

佐藤賢順

腹からの商賣

中野尅子

人形劇のつくり方

森正義

對談

佐藤(良)竹中、戸田

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(十共)。毎號定價三十圓(十圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」 一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿八年十二月廿五日印刷
昭和廿九年一月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

東京都千代田區神田區保町
東京都港區芝公園五ノ一〇
電話 東京八二一八七番
芝(四三)一三二八

年 新 賀 謹

大頂寺住職
静岡大學教授

石井眞峯

函樽教區長
竹下寂明

傳通院

西福寺
稻岡覺順

學校法人芝學園理事長
芝高等學校校長
芝中學校校長

中島眞孝

傳通院日曜教園
傳通サンガアソカ
佛書

法然寺
細井照道

本山光明寺
成實隨翁

佛書專門
有限社山喜房佛書林

西住院
戸川靈俊

青森教區長
長尾賢導

増上寺
大正大學長
椎尾辨匡

福井教區
大門俊我

慈教寺
武藤善友

函館市
稱名寺

宗會議員
近江隆善

鎮西學園長
上田貞雄

大本山善導
寺法主
江藤澂英

宗會議員
大村桂巖

宗會議員
山田鏡瑞

宗會議員
大蓮寺住職
江口一定

極樂寺
萩行密岩

法運寺住職
いてふ學園長
築田眞教

宗會議員
三河
原田嶺靜

尾張教區長
吉水文雄

宗會議員
丸地辨信

神奈川教區長
杉田義俊
(外一同)

同參事
魚住宣定

到岸寺
昆野秀賢

(いろは順)